

宇野弘藏教授最終講義における挨拶

著者	栢野 晴夫
雑誌名	社会労働研究
巻	14
号	4
ページ	180-181
発行年	1968-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017805

宇野弘藏教授最終講義における挨拶

栢 野 晴 夫

今日、ここに宇野先生の最終講義をむかえることになりました。宇野先生がいま社会学部を去られるということは、社会学部に
とって大きな傷手であると申せましょう。

先生がマルクス主義経済学研究における日本の第一人者であることは、諸君の既に知る通りであります。この先生によって昭和三十三年から今日まで、足かけ十年間もの間、社会学部の多くの学生諸君が学問のきびしさを学び、温く導かれたことは、まことに幸いであつたと申さねばなりません。

先生が、今日を最後として、教壇から親しく諸君に話しかける機会がうしなわれるということは、私達にとって、まことに残念なことであり、惜別の情抑え難いものを感じます。私達は、諸君と共に、先生の学恩に対して、深く感謝の意を表したいと思ひます。

先生は、明治三十年、岡山県倉敷市にお生れになり、第六高等学校を経て、東京帝国大学法科大学経済学科に入学されましたが、丁度それは米騒動の起つた大正七年のことでありました。

同十年経済学部経済学科を卒業されると共に、大原社会問題研究所に入られたわけであります。今日、大原社会問題研究所が、法政大学の付属研究所になつてゐることを考えますと、まことに奇しき縁と申せましょう。

翌大正十一年、先生は経済学研究のため、ヨーロッパへ留学、ベルリン大学で研究を重ねられ、十三年に帰朝されると、迎へられて東北帝国大学の助教授に任ぜられたのであります。その後、戦時中、職を退かれるまで、東北帝国大学で一貫して多くの子弟を育てられ、着々と研究をつみ重ねられたのであります。

先生と法政大学との関係は、先生が社会学部に見えらるる前に実はあつたのでありまして、終戦直後の昭和二十一年に、先生は法政大学の兼任講師をされてゐるのであります。これも何かの縁と申せましょう。

昭和二十二年、先生は、東京帝国大学、今の東京大学教授に就任されると共に、社会科学研究所に勤められ、二十四年、同研究所の所長になりました。二十七年同研究所所長を辞されるまで、先生は研究所の難しい運営に当られたわけでありまして、その行政的手腕は高く評価されているところでもあります。

昭和三十三年、先生は東京大学を停年によりお辞めになられたわけですが、社会学部教授会は一致して先生をお迎えすることに努力致しまして、ここに先生を専任教授としてお迎えすることになったわけでもあります。

十年という歳月は長いようで短いものでありまして、私達には先生をお迎えしたのが、まだつい先頃のこのように思っておりますのでありますが、あらたまって考えてみますと、当時から、既に十年という月日が経っているのです。この間、社会学部は目覚ましい発展を遂げてきたわけでありますが、この発展については、多くの先生がたと共に、宇野先生に負うところまた大なるものがあるのであります。

先生は、学問の途についてきびしくとも、諸君も御覧のように温顔溢れる先生でありまして、今後も社会学部発展のために何かとご助力を頂きたいものと念願しております。到底、満七十歳になられたとはお見受けできない若々しい先生でありますから、今後ますます学問研究の道にご研鑽されることと、私共大きな期待を持っております。どうか、いつまでも、ご健康でお仕事を続けられますようお願い致します。

学生諸君も、先生の深い学恩に報いるためには、先生の一生を通じ、一貫してたゆまず歩んでこられた学問研究の途を、先生の後に続いて歩んでいただきたい。それが、何よりも先生に対する諸君のこの上ない感謝のしるしになるものと私は思います。学生諸君の進む途が、たとえ学問の世界ではなくとも、先生が学問の途を歩んでこられたきびしい姿勢は、諸君のこれからの人生の上に十分生かすことができると思います。

重ねて、先生に感謝の意を表し、簡単ではありますが挨拶に代えたいと思います。